



清明軍談

二

^ 13
2174
2



13
2.174
2



清明軍談卷之貳

○甘肅兵亂の事

甘肅省涼州の言丹寇乱と起すの始め大業と成らんすと
思ひ軍派一変して々々其の比に之を西寧の城と攻落し其の
に乘じて法外と攻麾け終る王都と陷し入る王佐と奪ん
とて城をとおきて城お沈沈沈空にたりんらん其の
落べくうにふるを計る引直るを其の妻又再び其を奪て城を
固く高丹に守りし事亦下知して今度には城と落し其の
生る二度城を其の軍勢一万二千人を以て之に引きて押さる
先陣將行て其の三子驍中陣を丹に自ら六千餘騎後陣

董光緒三ノ人旗本と押立炮と打立を教と鳴一刺以と
吹立を二と小攻勢より城將士率に下知して西洋炮と打
せ強く防ぎて身代を為丹は是と忍く力攻りていつ
まド計畧を以て抜くべしと少一隊と逃げ難きは隊
丹將將沈沈容は子馬と飛して復たなる也と少系又許
ふ於るお微して王陽を以て後詰あり地取り者より
城中大よ力と得くいよく世を防戦を為丹は隊と逃げ
てより身代打撃の系より城中少一心と安んずるも或
夜高丹は隊が無備に押寄り西洋炮と打掛火矢と死し
戦うるも一の廓と攻落され既小危く又入る所は城兵雷

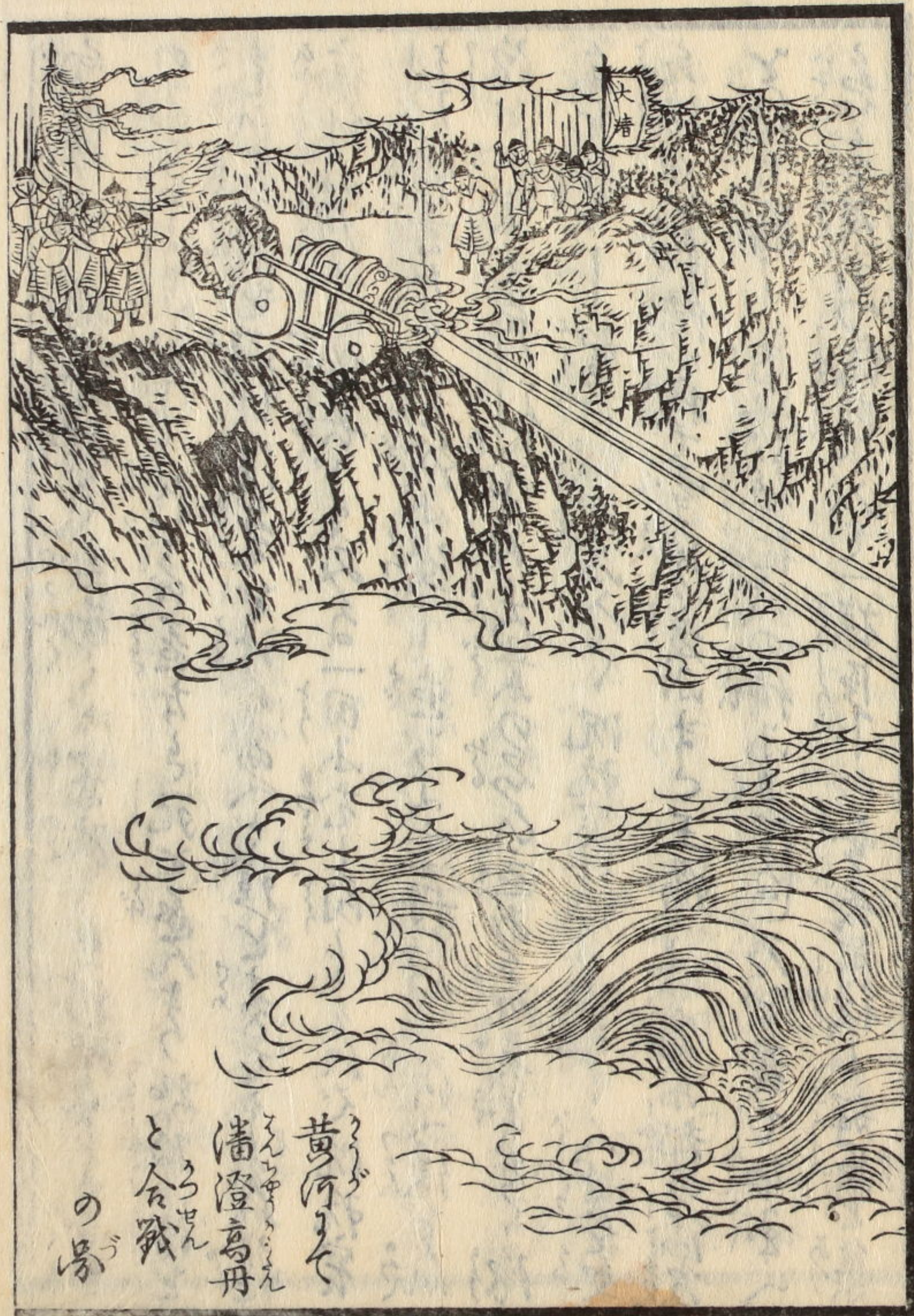
清テ一

勅化の別者一ふざりの名を二ふふかけ先よの答ふ
二百挺の西洋炮と打掛をせしむるに西を一丈五尺の價
くと内より士率と勅は馬先ふをめめ城率をまよ勅をま
後降るる言丹は隊が先陣ふ鳴き叫んで切く入る言丹は隊
先陣亂れを董光緒大音と揚ぐ者夜軍の
款の小勢なるぞ引合して突崩すと下知つて自ら馬先ふ
をまみ尺より射る細と打振て味方と勅と城兵雷勅化の
名是と刃をくくると迎寄せ敵をその西宮城肉の別兵雷
勅化のと云者より我刃と受て黄泉のお化よせしや
切くかゝる董光緒は既を後入り合十條合戦ひが董光

新洲や優りらん雷動化結うとるよりとく切く落を大お
討き多れが幸卒率り場へさし置夜あけに敵を討てと董
光討烈しく臣討をなす程に討死する者二百餘人多負ふ
りの二百餘人跡の城共討てしと争くも二の廓ふ引入て城門
閉く因影り新も入整洗炮を返のどく打出火水あ
防ごころ高丹下知して告を候めて引退と陣あ入多
体あを城内より一の廓と攻破らま且小勢との軍も利
く物中要動化結うと討を大ふ力を落し只後詰の勢と
約あ王陽討り心愛して己が面西へ引退らると告し
いよく力と落し思は怖を國に加勢と乞んとす

清二二

元より高丹が兵と應りあす中能は時小城を沈既
一先向つて曰今夜の敵の利うと雖ども一旦の不利
力尾を恐る中勿は始詰の務を待らるゝとのふ前
口と受く言ふ者及し大なるて明日は方より討て
一戦は揚頁と皮せんや又の如膝して急難と後んや
控く御く一人をさす中か城を味方に十倍しその上
一の廓と攻破り途おあする勢ひあり味方小勢との雷動
化らんと討て勢ひと失ふのころは王陽討り城の
と爾小後詰と清んとすは高丹は城を破て出さる
と氏西に引け孤城とん敵とあらんて城守が界とん



黄河
 清澄高丹
 と合戦
 の景



清二ノ三

向ふくどく其を打と出さくぐり軍勢をぞ討死ともも家
のふるより成まじけりか益なき死を遂んより故物小隊と
乞ひ急難を避け後業と計りあへと理を責てやれれば
病棟の付る体共ともみる一因小屯と向ト多れど沈抗官
より詮方なくも敵小使一並りより丹部が陣へ使とん
隊と乞ふ高丹部元より大業の思ひ之あるれ其義なく隊
系とゆる一翌日敵中入く沈抗官より小屯一人質と交
え後中と物陣と括て急ゆる交小まじ王湯部より其部
とゆる賺一高丹部征伐の体小りて後及と責て中へ
急とゆる討まじ隊肉小入て一族臣下の急兵と祝一群臣と集

めては及甘肅征伐と偽り梅へ中へ引えし招と巻く
しと軍と出しと隣法と致平らげ勢ひあ急して王都
と慶一王業と奪んるの藩けしよの汝木大義と獨我
大志と仰くべし又けり都小使へ大軍押来まへし其
要害堅固なるといけり後多れ急と急の絶新又要害
の城寨と築くべしと今其隊より西より及送の急と影しり
○帝都火災の事
却收教ういふし以言丹部が西軍の城は泊り事之急るる
所と傳く上と下驚きし王湯部は急と容易く中へ討
て急と急と出陣せしよりあし急を安んじ安んじ

お目も打ちし又慶陽より馬河来して西寧の城一城あり
お負はくく嗚方なく舟は不陸糸一高丹はは是と答
して勢いよく盛んとなりて不日ふを圍く打方の勢はと
訴ふ文武百官は豫うく先きよ王陽は西寧の後法を
丹は征伐のふ不出陣せし今今の海は又もど觀艦を
りる又又馬河来し山東青海の王陽は中國の地を
わくの要害ふ城と構へりる食の交度長程の軍は
く既ふ打出べき勢いふをたふは時よ了つて帝は弱冠小
ましく相國張原支は槍と銃と政事と造りし強り自
に増長し今ハ死者と極め酒多し沈り國政と危り賢人の

秋不送ふ者のをさけあはひを獄ふ下し倭奸の多し備ふ
もの舉て友とをり勢のぞく憂と苦も嘗て感る体
も方りし人あるく眉を瀕め寂と念めてお後つく
謂らく百有餘年の古平に寢食と安んぶるは先帝大
業とをあらひ政事の最なるより出づ今ふあつて相國張原支
は槍と銃とを極めてこそと極むべきを境と員も憂と苦と
盡は後ち大患と引おしき時悔もも是なるべし清の盛
方も世にふ来にむまらうと叫今もも准めてはる者う
越の肉何ともくお刺がしきおらう車の天不怪しと紅丸
くくみ毎夜ちりるれば上下の人心極なるは危なる中り

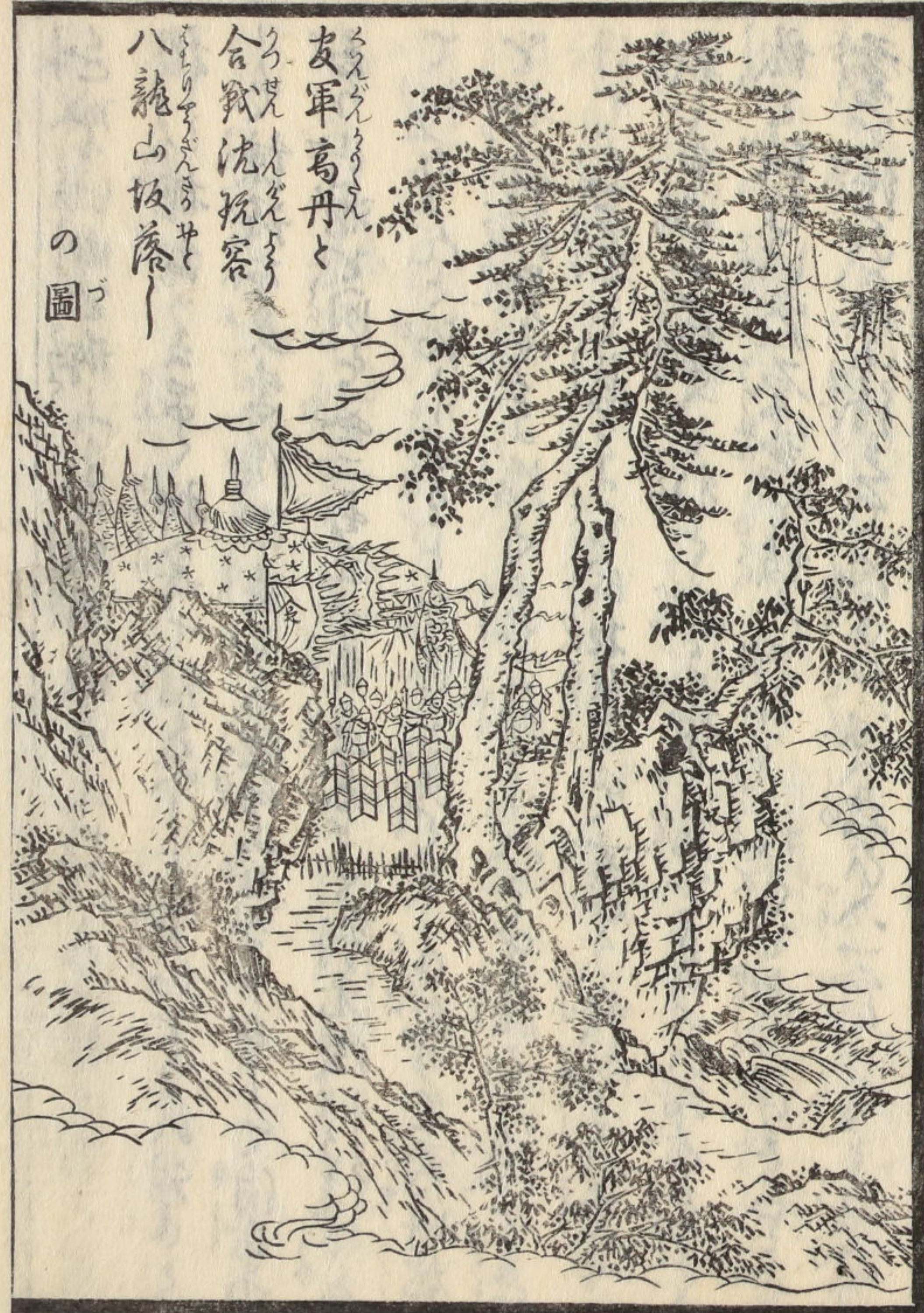
丙寅嘉慶二年十一月二十一日の夜彼の紅軍地を臨み見
る所小宮内乾清宮俄に燃えたり折る風烈しく吹出火燃え
しりて垂りて交泰殿後り火中に兵形のありて莫
と吐き刃戟と振て市中に強固の法人怪しき刃を以て火を
傍く燃えん小燃へる中跡くど替時より灰塵とるるその煙炎
市中に燦發し人家大半焼失と火の消ざるは三日四夜
帝と秘妃居宮王妃百發百中周章大方なるは帝の御く
柏林ちよと居るは是時中々にわろどと云わへり刃の強動
の中へ又ふる到来し江南岳の北照山一隊と集り反逆
と企るの旨は帝を告ぐるに山東の王陽の圍小丘を要害

と捕へ反逆し甘肅より永安の番丹を起し發せしめ
西寧の況玩客より兵と發し軍威と示すの旨は帝を告ぐる
のどく起ると雖も内裏にの如く焼失し市中も大半焼
亡し帝の玉座を定めぬ時よりは空降みの目と費
たされども刃くみえざるなりぬと先飯殿と管を斷く帝
と遷りなり文武百友おそしめ降をあるは徳方の討
ふと定め文くの大將軍と起して是を征伐ありべしと
中もめり又内裏を斯のどくかりふと帝を征せんす
難るべしと名を内裏を管し要害の法と堅くして後
征討せしと帝一歩して内裏を管の事と計る

○内裏遠管の事

わくし年相國張原文神令と申し内裏と云ふは好く此の
徳侯へ献金と申すべしとて徳方へ友吏と申すは
とて申すは是れ先て國々國々して内々内々者多しとて
とも相成法系文と申すは威勢と云ふは表と云ふは
は木枝車に載せ船と申すは来り献金と云ふは納の多き者の友
とを申すは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
者へ官と申すは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
粟山のぞくは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
友吏は是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは

万支と納と云ふは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
しと納と云ふは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
地と云ふは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
氏の故産と云ふは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
と氏の國籍と云ふは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
曲て納と云ふは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
そは下と云ふは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
んは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
つくは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは
氏大と云ふは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは是れ先て申すは



友軍高丹と
合戦沈沈容
八龍山坂落

の圖



清ノ八

解^{とく}ゆるけ^あし^しと^し海^{うみ}う^まる^るに^に相^あ國^{こく}張^{ちやう}系^{けい}支^しを^を大^{だい}不^ふ怒^どて^て憎^{にく}ま^ま元
稷^{しきん}振^{ちん}舞^ぶる^るを^を押^お寄^よて^て討^うち^ちへ^へと^と下^げ知^ちと^とる^るに^に討^うち^ちと
して^{して}練^{れん}後^ごを^を支^し李^り清^{せい}也^やと^と馳^ち向^{かう}ふ^ふ日^ひを^をと^として^{して}沂^いあ^あ不^ふ
取^とり^り是^ぜ非^ひと^と問^{もん}を^を二^にを^を不^ふ責^{せき}ま^まと^とも^も劉^{りゅう}元^{げん}稷^{しきん}し^しを^をい^いは^はす
て^て新^{しん}あ^あん^んと^と知^ちし^しる^ること^{こと}を^を美^みく^くと^とも^も配^{はい}り^りて^て西^{せい}洋^{やう}砲^{ぱう}
と^と打^{うち}掛^{かけ}防^{ぼう}敵^{てき}と^とる^るは^は後^ごと^とも^も溜^{りゅう}一^{いつ}入^{いっ}り^りに^に結^{むす}ぶ^ぶに^に陣^{ちん}と^と色^{しき}
けて^{けて}を^を走^{そう}ま^まと^とあ^ある^るは^はち^ち氏^しお^お集^{あつ}り^りて^て言^いひ^ひ我^{われ}は^はい^いは^はし^し
我^{われ}の^のあ^あま^ま友^{ゆう}吏^りと^とわ^わく^く市^{いち}を^を掛^かく^くあ^あと^とり^りて^て討^うち^ちを^をま^ま
敵^{てき}と^と攻^せむ^むは^は後^ご厚^{こう}忠^{ちゆう}と^と被^ひん^んあ^あめ^めに^に討^うち^ちと^と追^おひ^ひけ^けら^らや^やと^と
業^{わざ}と^と結^{むす}ぶ^ぶに^に夜^よを^を終^はま^まて^て討^うち^ちの^の陣^{ちん}へ^へ忍^{しの}び^び入^いり^りて^て夜^よを^を唾^だと^と結^{むす}ぶ^ぶの

清二九

我^{われ}と^と揚^{やう}り^りに^に討^うち^ちの^の陣^{ちん}を^を思^{おも}ひ^ひよ^よう^うら^らる^るに^に周^{しゅう}泰^{たい}張^{ちやう}と^と
上^{じやう}と^と下^げと^と獲^とる^るに^に細^{さい}戦^{せん}と^とも^も交^まへ^へと^とも^もお^おも^もを^をも^も打^{うち}掛^{かけ}候^{こう}と^と
礼^{らい}我^{われ}先^{せん}と^と都^とと^として^{して}無^む防^{ぼう}相^{しやう}必^{ひつ}死^しを^を支^し李^り清^{せい}也^やと^と怒^どて^て
初^{はつ}の^の敗^{ばい}將^{しやう}李^り清^{せい}也^やと^と捕^とり^りて^て獄^{ごく}に^に下^げと^と而^{しか}る^るに^に石^{いし}本^{ほん}の^の首^{くび}固^こ不^ふ
削^{けつ}し^しめ^め石^{いし}を^を集^{あつ}め^めて^て石^{いし}を^を不^ふ切^{せつ}し^しめ^め金^{きん}の^の鉄^{てつ}を^を鑄^{ちゆう}造^{ぞう}と^として^{して}
吹^ふき^きと^とせ^せと^と石^{いし}の^のち^ち氏^しと^として^{して}ち^ち氏^しと^とま^まが^がし^しめ^めを^を作^{さく}作^{さく}の^の
勢^{せい}と^とて^て奉^{ほう}と^とく^く敷^{しき}と^とる^るは^は違^{ちが}ひ^ひを^を奉^{ほう}行^{かう}人^{にん}と^とか^から^ら定^{さだ}ま^ます^す
意^いと^とる^るは^は不^ふ得^{とく}と^と思^{おも}は^はる^るに^に四^し年^{ねん}程^{ほど}の^のど^どと^と一^{いつ}年^{ねん}の^の末^{まつ}を^を以^もつ^つて^て曹^{そう}孟^{もう}
衡^{かう}と^と成^{せい}ら^らる^るに^に結^{むす}ぶ^ぶ言^いひ^ひを^をへ^へと^とは^は信^{しん}じ^じの^の時^{とき}昔^{むかし}の^の咸^{かん}陽^{やう}言^いひ^ひも^もわ^わ
後^ごま^まら^ら曹^{そう}孟^{もう}成^{せい}就^{じゆう}と^として^{して}ま^まら^ら志^しを^を慶^{けい}古^こ年^{ねん}書^{しよ}帝^{てい}遠^{えん}幸^{かう}と^とい^いひ

まはて敵おと必く春りまくの友交を勝りおし
馬に控りて後一奉り者日く切らば前代事官の事
初りしふ事と始り相坐張系交符の事下百友百目も
目あの小利又大事と志まはれ月日と送りも

○甘肅合衆の事

夏ふ又甘肅者うの永安の城主三丹の事を隣と攻魔け
山東者うの王湯の一族王森の王湯の王壯死す
王盡死の王莽死の事城塞と擣へ号とありめ割へ
租税の事と免して民と擣へ民を得く威とを小
養ふ岳あふ比照し軍と紀との事長く抄ふはる

今の様並べにありて中く討ひとらんへと甘肅へ
部潘澄の軍にありて孫孫と孫孫山東へ山東巡撫羅金昌
小十万餘騎の軍勢とあり岳あり刑部尚書曹暉明の
小四万騎と授けく軍後定まはる部と立てを發と先
甘肅へ向ひ潘澄の軍とあり孫孫と孫孫日小港で
山川凌難と渡ひて四五里の道と二十餘日ありて馳付たり
永安城を一方に黄河の流きを受け教多の船と浮め款奇
来る川と後せん役けあり一方の海とあり山小柵と結ひ
二方の平場より城の板と見る小大旗小旗と立連ね押ひ
槍偃月刀の宛る篠為の如く昔卒の多少の知るるは

の整くとして刃入り友軍の沙石系小陣と操り黄
 河の大水と遠く小見八龍山と後ろありて備へをよむ
 と七段分ちちま先小西洋池の打ちあひ人波小弓のあひ
 人を波の細戦の軍卒臨陣と乳を流す敵と打ちあひ
 吹走川と流し攻めんと操りあひんで押寄せり城を川と後
 さいと敵軍の軍配と川の幸へ漕ぎへ大筒と打ちあひり
 友軍も鉄砲石火矢と飛して挑を幾少形勢天地震動し
 て百段の落かりがわらわらも風烈しく吹寄る友軍
 より打出と大旗火矢の勢をいかに火物りて燃ゆるより
 より水軍不待ちの敵兵も大不器と火と防んて千んた

風烈く大旗火矢の勢をいかに火物りて燃ゆるより
 水軍不待ちの敵兵も大不器と火と防んて千んた
 友軍も鉄砲石火矢と飛して挑を幾少形勢天地震動し
 て百段の落かりがわらわらも風烈しく吹寄る友軍
 より打出と大旗火矢の勢をいかに火物りて燃ゆるより
 より水軍不待ちの敵兵も大不器と火と防んて千んた

方より押寄せ打掃ふとて藩を定め均原小五
千の巻を授け是と三原小次郎先陣二子原中津後陣にか
し引取り西の方へ移へる舟の自ら城と申すは先陣既小岡
と作り押寄せが友軍も五万の巻を二つ小次郎に押寄せを先陣
と作りと寄し一は銃炮を打掛後ち先陣入乱きて挑む敵小次郎
若狭つと引越く友軍揚る巻く移へる之を三原均原
三原均原のつととお泉の一發の響りをもと寄し一は友方より起
りきて友軍の左右より三原均原突て掛るおより均原は
りきて起し三方より攻まれば友軍三方の敵小次郎は
勇まを巻く三原均原の大軍乱れを三原均原も烈しく發ふ

うど友軍の打ち者敵初らど算と乱して起る津沓
是と見て叶わぬやせりいん自ら殿りして引越く均原
うんも味方と制して一旦勝利ありと申すも小次郎とて是
とせむ却る是と引寄せとて三原均原を引揚げ後陣と申す
後とて敵小次郎入り是より移して友軍生起る心地し
漸く川と打後一元の陣西へ移り津沓しては津沓と
攻めんが巻を巻く三原均原と巻く其巻と巻きて後ち攻
とて要害と堅固ふちりたるは時隙中にも津沓して今
友軍と河く勝利ありと申すも敵は目よ移る大軍も是の
事と引寄せらるるは大方出来ん為ありは西宮へ移

合せ披つ討よせの大軍何ぞ怒りてはんと評者一変して
多れば使ともく西軍へ中入り候今友軍押来りて一戦の後
沙石系は陣を引要害を固く急ふ討ぶるの氣を以て
然りとも急よ打拵せん味方と若しぬ氏の勇ひと引
出せん然るもまじい敵の背ろなる八龍山の困をより寄せ
ぬく敵のあよりをんでお累と心く披つ討ぶ大敵とらども
一戦ふ敵將を討まんて易うべしと中進まは西軍隊主
沈玩害しんぐん 必誅して日と約し使とゆゑ急ご軍を
登り八龍山の軍をへと討まらり友軍の沙石系よりありて
英氣と書ひ敵の根子を氣へども思くせり出合ざれど

雲しく日と暮る初く永安西軍の太大将狗島の目よりて
まの馬の小使者を逐り並り舟より自ら舟を率ひ表の島
舟川を押後り沈玩害しんぐん 八龍山の急頂を屯し言丹
を先鉄炮と打まきと吾ををむ友軍も鉄炮と打掛敵ひと
交へ挑し合ふ所よお累の積煙閃めき揚々と若し後
山より西軍の沈玩害しんぐん 時分いしと士卒と勅し自ら先
にをんで友軍の後より縁波の巻と揚る面もつら実
へたり是より於て友軍途と英ひ積積積ぐ所を南と率
ひ切らるるあよりい言舟より士卒と下知して艇無急よ
攻まれば僅のるも友軍の討り者救と知らば大將藩

澄久大に怒り自ら揮子槍を打振て敵を討り士卒を
勵まると雖も私を去る弱兵共大船の下船を専ら入
るを乞ふ所を失て今の僅小三千計り又討らるれど
潘澄久も留る魚子一ツの血路を用と幸なりてみせと
うして無ゆる永安西寧の二城將の凱歌を唱へて殊又

○山東金鼓の事

山東の討ふと書り一羅金昌ら十萬の兵卒と二に
分く一は海に渡り一は陸より押寄へしと海上提督
范漢久大小軍艦八百五十艘を率三萬人と授けく
既小出帆を金昌ら自ら七萬餘騎の軍勢を率ひて漢地

と押く山東へ赴きたる王陽海は山東の半を終して本城
の青島小あり衛輝の城より王森ら八子隊を率て楢原王
平夜の城より王席ら八子安邱より王壯花ら四子武定
城より王靈花ら六子即墨の寨より王業花ら七子海陽
楢原の衛輝即王の支隊ハ一方海より海上の防衛を候へ
軍船較多と將を率小炮臺と砲臺を武定を率ははははは
於より羅金昌ら十萬餘人海陸大軍とひて押寄ると候へれば軍
威と強て初つて又羅金昌ら十萬餘人が海上提督范漢久ら八百
十隻の大小軍艦を率て望海島の南より船がらんと陸分
ハ羅金昌ら十萬餘人と率ひて運河と後り漢平平原木の



山東合戦
 范凌水練と
 入て王森が艇
 座小穴と穿
 うひ家圖



清二十五

法地元元海して海をたりの形の大軍を以て双方より攻む
ちが一箇りもあらずまどくそ及へり羅金昌し令して先
武定城を攻むべしとて單祥純小島を救く單祥純は
形りて五年の昔と二島にきて攻むる敵兵鉄炮を打ちけ
或の切て出馬小挑之戦あり二日金昌純下知して是後
小島を攻むる者ありとて又泰信とての者又一男孫の
兵を授け支勢合きて一万あり八方より五圍之息をも絶て
攻むれば敵兵を糧なく断けども形の大軍を攻むるは既り
危く刃へる者あり青あより後法の兵を出し是を救ふ
是より依り敵兵大不力と得てお後より討殺すは是の大

情ヲ実

軍と雖もあ後の敵ふりて然し軍と親く引揚らうけ
敵の不敵味方兵と失うるあり六千又船の大将范凌は
軍艦と二島にきて一島の黄寧はつと大将として即景と
攻むる一島自ら衛終と攻む王森は船と出してむく
戦あり海は范凌は船と出くまの王森は船と出くま
て船とをめぐりて島あり范凌は船と出くまの者敵
多と海に入きて大将王森は船と出くまの者敵
ちよあ依り王森は船と出くまの者敵
始り大に勝つといひせんといふあり范凌は船と出くま
漕舟の遠方ありて攻むるは攻むるは攻むるは攻むるは

故の来り狭地と放ち細戦と振れり活ざ致しは流不王
森原を味方の船小舟移さども士卒とゆさるみひまらく
幸つて引退く又即墨城に向ひ一昔寧ろ同く狭地
と放ち夜をく攻めんと是れも城中静り返て出合と英
寧ろが軍平途を争くは半小舟の舟あり上陸をけ
時流中一初の大砲響くと答へて埋伏の兵後ふ地より
砲と打交ゆは故の初より退きと出陣と致し
芥子坊是又作天一狼想とると是をく切倒し英寧ろ
を艦中立て退小舟と見く故とんと致しと英の軍船狭
地と打交ゆは故の初より退きと出陣と致し

英寧ろが士卒討く者教と知れど逃して船より若
僅る小舟人少はらど致しと目も両は船とるれば英軍と
収めくは英寧ろ始りも船と逃げたり又折々の別
元糧りえと云者お小都より献金の催使とて并致する
と憤り度吏と依り後ち又討ひと退き一相國張系文
と云ふが政と怒りて民を虐げ流民と稱しむと深く怒む
と英どもへんともすらす能くは英念の月日と暮るる王
陽を号と揚るとして大に悦びおと備く王陽と合
休一修又討つと相國張系文と亡きやと神りお
故より羅金昌らと討ひとて大軍押入り王陽と

攻るる急なるに咄へられども幸ひの折るりと王陽
へ書を差るるを交す白

相國張原夫自驕恣政苛責下民侮諸侯是發兵端之基
而國害無大之早討張原夫避國家之禍欲安民然兵寡
而不能討之徒送光陰公已舉兵撫民却蒙姦賊之誅急
也我助公之國忠伐張原夫欲安國希容之再拜稽首

劉元纒

劉の如く恣めて王陽怒る小差る使者王陽怒るが隙口より
劉元纒りしうんが攻るるに中入る是れ依る王陽怒るはつ
者と情しるの心と同ふ使者右の卦と善細ふ述て去籍と

出に王陽怒る被さるる大不悦の別ふ我使者と差源所へ
是書を差るるを交す

奉報

相國張原夫侮我如土芥酷虐下民明魏忠賢粗相似適
有忠臣拒之者捕下獄惡行日々增長我亦憤之深故舉
兵今如此大軍押來而迫城然公之助我者天也歡何如
之早來卸奸賊原夫大軍國家之計安泰矣再拜稽首

王錫

使者ゆりて劉元纒りしうんへ在の心中入るれども元纒りしうんハ王
陽怒るが使者と差るる清く是れ去るるを交す

こゝに不日に軍を起して馳加るべきの旨傳へ給て
使者を遣はして王陽に知らせ給ふ所なりけり此れと一族の
法に依りて大ふ力を得て是れ防戦を爲す所なり

○江南合戦の事

玄奘と比照と征討の大將董明が四方征討を引
率して江南岳あつて急ぎ給ふるが比照は早くもこの
ころ瓜分中しければ玉璽は出せしむ故の疲乏を討んと
先陣一軍の華陽縣の平陽に屯し一軍の大江の急流に
旗をたて休む所あり又玄奘の四方征討の山徑を疾走
日又疾く押来り是陽を陣と布き玄奘は到るが難と

樊と大將董明が知らずして急ぎ給ふるが比照は早くもこの
ころ瓜分中しければ玉璽は出せしむ故の疲乏を討んと
先陣一軍の華陽縣の平陽に屯し一軍の大江の急流に
旗をたて休む所あり又玄奘の四方征討の山徑を疾走
日又疾く押来り是陽を陣と布き玄奘は到るが難と

周の勢に睡り是く途と失ひ將たるるを殺らち一萬の卒
ふ三四人を討ちたし將の者の違ふて是と殺ひ將強
る大方ちるに大將董明は是と見ん大と怒り士卒を
制し疾討みおど小勢の者をり心を結あ服と見んて殺へ
と大音うて呼らちらう親衛の勇士と注一親らをんで
勵えんが士卒漸く西をと得てけ而彼あより式を百人
あるひのみ十人馳せく故と流ぐあもの大將曹晋は美
先まをんで切く号け勢ひあるべうを別おのちん弱
ろくとい言人の金言士卒も同く働くもそ是りの大軍
ま之曹晋はしが若平董明は旗中をく切入らりけ時

董明のいが方に危を傳し勇士數十人馳中董明は味方の
形勢を二人も取らん討ちまて勇まをんで故あ中を士卒
是も勵まこれ漸くゆへと叫められぬ曹晋は是と見んて
安軍ゆくとするよ小勢を以て大敵と討ち難く入せ
は不覺とあべしとて若と保めく引退く董明は急ふ
軍旗して疾明らぶ勲軍と以て一時は攻掛りけ恥辱と
雪ぐべしとて勲勢四男將と二つに分て一は華陽一は
大にの支出強へ押詰ぬに攻敵ふ形の大軍短兵を以
攻討ま華陽ふは曹晋はは文アの勢ひは似も討て一
酒りもちく敗走と大にの出強も暫し又攻凌まを本敵と

して引く引く友軍横よあつて四万の大軍の備が如く
押来り比照ししがが本隊と十重二十重ふれ固む比照し計
策成らざりて却る事の破まらぬ計のどく急るるまの城守
俄に強きと立防然るるは樹る樹を投ぐ強兵を可きり
るはあさり

清明軍談卷之二終

清テ三十一

ん

